

第V章 総括

第1節 横穴について

今回の調査で確認された2基の横穴のうち、先述したとおり1号横穴は調査前からすでに開口しており、副葬したと思われる鉄鏃の出土位置も当初の状態ではないと考えられる。地元の方の話では、昭和30年代の当該地の土地造成の際に横穴（1号）が発見され、その際に刀などの出土品をどこかの団体が持ち帰ったということであった。（現在は行方不明である。）2号横穴は玄室左壁付近で出土した2～7、9の鉄鏃、鑿と奥壁右寄りで出土した8の刀子が確認された位置が異なっており、また玄室の中央部で確認された69点の扁平な円礫は礫床を構成するには少量で、配置も企画性が感じられず、礫床を構成したものであれば、動かされた可能性が考えられ、鉄製品の2箇所出土位置も踏まえると、追葬の可能性も考えられる。1号墓と2号墓は隣接して構築され、軸方向も1号墓が北から東に38.5°、2号墓が38.0°とほぼ変わらず、同じ群内にある近い時期に造られた横穴と考えられ、2号横穴から出土した鉄鏃類は6世紀後半頃と比定される。今回の調査では、SE1、SE2には宮崎平野部で横穴の墓制が導入される遺存状態の良好な6世紀代の土師器、須恵器（188～195）が混入していた。先述したように、丘陵西側でも横穴が構築された可能性があり、今回の調査例、遺存状態の良い須恵器・土師器も踏まえると、今回の調査事例2基を含め、丘陵全体に横穴が造られた可能性が考えられ、曾井城建設によっても横穴が壊された可能性がある。

第2節 曾井城との関連について

今回の調査のうち、曾井城との関連の可能性が考えられるのは、SE1、SE2、SE3と土坑群である。SE1、SE2は深さが2m以上と深く、断面形もV字形を呈しており、等高線に平行して設けられる横堀としての機能が考えられる。また、土壌の堆積状況からSE1と同時期に機能していたSE3もその断面形から堅堀としての機能が考えられる。土層の観察状況からSE1とSE3の機能が損なわれた状態（遺構内に土が溜まった状態）でSE2を設けている。SE1、SE3とSE2に含まれる遺物の組成を見てみると、SE1、SE3では15世紀後半頃の切高台の白磁皿が多く含まれ、それに対比するかのようにSE2では16世紀後半に出土例の増える青花が多く含まれており、SE1、SE3の改修や浚渫のためにSE2を設けたというよりも、SE1、SE3の機能が完全に損なわれ、一定の空白ののちにSE2を設けたと考えられる。SE1、SE2と西側で切り合って検出された土坑群は、調査の中でその遺構の性格を明らかにすることができなかったが、その土坑群の存在はSE1、SE2（堀）の内側に一定程度の平坦地があったことを示唆するものであり、堀内側に帯曲輪があったものと思われ、第10図内に記載した「切土造成の痕跡」もその帯曲輪構築に関連する痕跡かもしれない。

【参考文献】

- 1885 平部嶺南『日向纂記』（歴史図書社より1976復刻）
- 1964 南九州短期大学附属宮崎高等学校郷土研究部『郷土研究』第2号
- 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 1999 宮崎県『宮崎県史 叢書 日向紀』
- 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
- 2013 宮崎市教育委員会『史跡穆佐城跡Ⅰ』
- 2016 宮崎市教育委員会『史跡穆佐城跡Ⅱ』